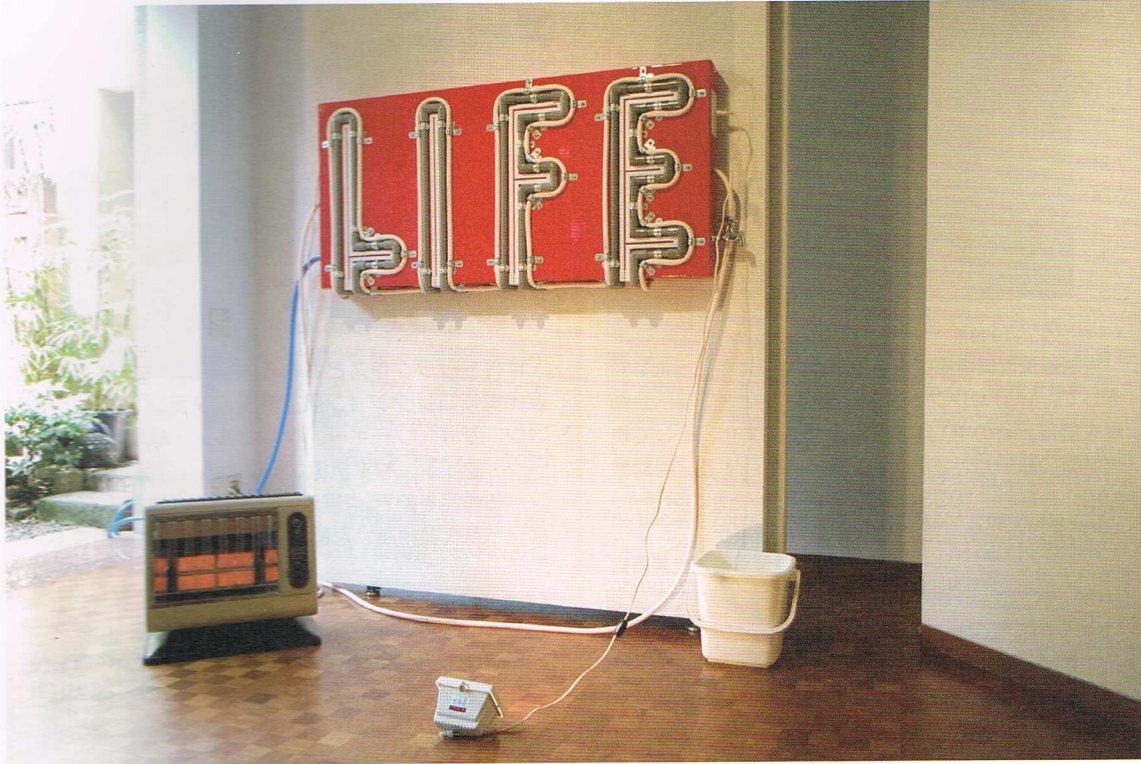


2013年 電気、ガス、水道、ストーブ、ライト、水道管、蛇口、  
電気コード、電気用モール、ガスコード、パネル、ライリッサ  
作家蔵

文・工藤健志

(青森県立美術館学芸員)



まず目につくのが「LIFE」という文字。アメリカの雑誌でよく目にするロゴである。

よく見ると、文字はガスの配管と電気コード、水道管で構成されている。ガス、電気、水という、いわゆる都市生活（ライフ）に不可欠な要素を、それらを供給するための管（ライン）で表現した作品であるが、一方それは実際に配管としての役割も果たしており、パネルからはガスと電気と水がきちんと供給される。

岡本は、日本人の多くが共有しているイメージ、常識や価値観を別の視点から問い直したり、禁忌を含めた人間の多様な欲望の描出などをおして、笑い、驚き、怒りといった人間の感情を直截に刺激しつつ、現代日本の社会／文化がはらむ問題を暴き出す。本作においても、「3・11」によって明らかになった、現代に生きる我々が、「生きること」そのものを社会に大きく依存している状況がユーモラスに、そしてアイロニカルに表現されている。

作品にはガスと電気と水が実際に流れている。そう考えると、本来生命を維持するはずの装置がむしろ恐怖として見る者に迫ってくる。「LIFE」という文字も一気に空々しく感じられはしないか。マスメディアの功罪という視点も含め、「現代の構造」を考えるための社会模型として本作は機能する。

(くどう・たけし)